1982.

# 義太夫

義太夫協会々報
第26号
昭和57年10月20日
社団法人　義太夫協会発行
〒104　東京都中央区銀座
6−18−2 新橋演舞場 B2
TEL　(541)5471

## マスコミと女義太夫

義太夫協会会長　吉　川　英　史

歌謡曲の人気歌手のことなら、結婚はもちろん、出産だ、離婚だと、マスコミはしつこく追っかける。良かれ悪しかれ、マスコミが扱ってくれなければ、世間は見向きもせず、すぐに忘れてしまう。それほどマスコミは強力なのである。生殺与奪の権を持った暴君である。

そのマスコミに女義太夫が扱われるようになったのは、一昨年の重要無形文化財の総合指定辺りからであろうか。続いては、竹本土佐広さんが個人指定を受けられたこと――「人間国宝」――が取りあげられた。これに加えて、最近二つのことがマスコミで扱われたが、その一つは比較的知られていないニュースで、私は読売の英字新聞（ザ・デイリー・ヨミウリ）で次の記事を読んだ。――

関西大学の井上教授の発案、岸大阪府知事や藤本義一氏のバック・アップで、豊竹団司さんを「ギネス・ブック」に載せるよう推薦することになったという記事が大きく扱われていた（九月六日）。

「ギネス・ブック（Guines Book）」というのは、英国の有名なビール会社ギネスが一九五六年以来刊行を続けている本で、あらゆる方面での「世界一」の記録を載せたものである。この「ギネス・ブック」の最近版によれば、最高年齢のオペラ歌手はジョバンニ・マルティネリGiovanni Martinelliで、彼は八十一歳である。

それに較べて、豊竹団司さんは十歳も年上の九十一歳であり、今も九人の弟子たちに稽古を続けているので、現役の声楽家として、「世界一」の最高年齢だというわけである。しかも、団司さんはいまだに虫歯が一本もないと書かれている。驚嘆のほかはない。「ギネス・ブック」への登載が一日も早く実現することを望みたい。

さて、今一つは、NHKの朝のテレビ小説「ハイカラさん」で放映された娘義太夫の件である。視聴率の高い番組であるから、余り説明を要しないと思う。桐原ホテルのまじめな主人桐原次郎太が、娘義太夫の人気者竹本春清に浮気をしているという噂で、一と騒動起こるというものである。

（2頁下段へ）

人間国宝

# 土佐広師にきく（二）

前回、大変御好評いただいた竹本土佐広師の話の続きです。土佐広師は、本牧亭の定期公演のほか、〝花暦　銀座邦楽名人会〟（銀座ラ・ポーラ）、〝三越名人会〟（三越劇場）での演奏、後継者の育成、協会の役員会等々、多忙なスケジュールを精力的にこなしておられます。

**旅の思い出（十七、八の頃）**

昔はそんな風で月給はもらうし、御祝儀はもらえるし、旅行きっていうと月給の倍もね。道のりによって倍って所もあるし、又その遠い所になるとその倍なんてね。だから喜こんで旅に行ったもんですよ、行くと必ず着物一枚ふえるなんて思ってね。

旅では、町廻りってのあるんですよ。車に乗ってね、えゝ人力ね、ガラガラ音のする人力ですよ。真打が一番うしろで、ちゃんと「出」の着物を着てね、前に楽隊つけて行くの。どうしても町廻りをしてくれ、町廻りを出来ないのは着物がないんだって。「出」の着物でしょ、着物がないような芸人はろくな芸人じゃないって言うんですって。いやなのよね、顔さらされて歩くんでしょ、いやなのよね。だけど、町廻りしないと入りがないって言われちゃうの。……居眠りしちゃうのよね、余り長いと。えゝ町中廻って、辻々に立ってどこそこでやってますって。くたびれちゃってね、前の人が居眠りしてるのが見えるのよね。そう、全員行きますから十台程続きましたね。

＊　＊　＊

若い者は桃割れ、年とった人はいちょう返しでしたね、私は、いちょう返しを結う時分には束髪っていうのばっかりでした、余りいちょう返しって頭、好かないんでね。旅に行って暦みたいだって新聞に出されたことがあるの。暦っていうと上に新があって下に旧が書いてあるでしょう、あの頭はいけないって。肩衣に似合わないのね。今でこそ、皆こんな頭でも何も言わないけど、やっぱし肩衣には日本髪が似合うんですね。……いいえ、島田は重たいから。舞台に上ってる人は、今よりもっと首振ったりなんかしたから、重くってダメなんですよね、だからいちょう返しが多かったですね。

（1頁下段より）

その竹本春清には、現在の女義界の若手、竹本越孝さんが扮し、「太功記」のサワリで大役を無事こなしていたので、ほっとしたが、この事件が落着するまでは、多少心配であった。書き出しの所で述べた通り、マスコミで取りあげてもらうことは、ありがたいのだが、浮気の相手として登場する娘義太夫だとすると、芸よりも色恋の方が問題になるはずである。今の女義太夫は、明治のドースル連時代の娘義太夫とは違って、芸一筋に精進しているのに、昔の俗悪なイメージで考えられては困る。小説やドラマは、えてして誇張したがるから困るのである。

そのような心配でテレビを見ていたところ、予想通りカンザシを落とし、客はこれを争って拾う。「ドースル、ドースル」の掛声を浴びせる。

しかし、越孝さんの人柄・品位で、美しくは見えたが、品は悪くなかったし、厭らしさはなかった。これには、当局の関係者がかなり配慮があったのではあるまいかと思う。客にも、「年は二十二、三だが、そんな年は感じさせない位色っぽいものだぜ」といわせるくらいで、やれやれと胸をなでおろした。

それにしても、あのテレビを見て、わたしは、前からいっている次のような希望を一層強く感じた。

国立劇場主催、または国立劇場と義太夫協会の主催で、「女義太夫の今昔」の公演を、その生き証人が健在な今のうちに実現して欲しいということである。

## 大正七年・上京

大正七年に初めて東京へ出て来たんです。東京市中には随分寄席があったそうですけども、その当時、義太夫の定席はもう「宮松」だけ、あとはポツポツと、たまには義太夫がかかったこともある、落語もやったり、そんなことだったんでしょうね。「東橋亭」とか、それから九段下に一軒ありましたけど、市中はもう流行らなくて、浅草公園の「パテー館」へお客さんが寄ってたらしいのね。

パテー館は、前は東京の人ばっかりなんですけど、真打だけ二月交代で大阪から呼ぶんです。当時、小仙さんとか、団司さんだとかが代り代りに出て、私がまだ来てなかったので、パテー館の支配人のホノベさんて方が「何でも今度はあんたに来て貰わなければ」って言ってみえた訳、南陽館で切前語ってたのを聴きにみえてたらしいのね。で、お師匠さんに相談したら「東京は宮松って所がヒノキ舞台で浅草公園はちょっと格が落ちる。初めて行くんだから浅草の方はやめにした方がいい」と言われたんで、その通り言ってお断りしたんです。一回は「そうでっか」で、又言い出して何回も言われて、終いに「今度は決めて帰らないと私の顔が立たないから」ってね、お金を放り込んで「どうしてもこれで来て下さい」「そんなこと……」と言っても聞かずに帰っちゃって……そういうような訳で、東京に来たのが大正七年七月のお盆でした。

## パテー館

大変にびっくりしたのを憶えているけど、ずっと表につながっているんですよね。真打だけが変るんで珍しいのね、お客様は。八時から割引になるんだけど、割引から真打が聴けるからそれまで立ってる訳。それこそね、ずうっとつながっているんです。方々の映画館でもリンをジリジリと打つんです。そうするとたちまち満員になっちゃうんですよ。舞台に上ると頭ばっかり見えてるようで……そんなんでした。お盆の時にレコード破りしたって喜こんで貰ったこともありましたね。

……いえ、椅子です。映画館を直した席でしたから椅子席で、下駄の音もガラガラするし、天井が高くて私なんか三日目くらいに声をからしちゃってね。真打だから一段語らなくちゃならないでしょ、うしろへ「音声を痛めておりますので御容赦下さい」と書いて貼って貰って。で、廻り舞台が廻ると「ア、また今日も貼ってある」、貼ってないと「今日は一段やるな」なんて。半ばでやっと治って二月目に帰ったんですけど、また呼ばれて十二月にも来たんです。その時、大きな店が皆こわされたりね、えゝお米騒動だったんですね。

## 東京の寄席

パテー館ですか？「金龍館」って今でもありますけど、金龍館が目あてで、そのすぐ前の角でした。おすし屋横丁をまっすぐ行った映画館がいっぱいある所のかかりですよ。そこをまっすぐ行くと「大勝館」これも今でもあります。その向うは「江川」ってのがあったりね。そこらに「江戸館」これも義太夫ばっかりだったけど余り大きくないの、二流の人が出るような――ほかにもう一、二軒あったんです。

パテー館ていうのは随分大きかった、三、四百人入ったんでしょうね。二階もありましてね、そこが満員になっちゃうの。市中の席が入らなくなったんで、ホノベさんあたりが案を出してパテー館へまとめたんでしょうね。大概、昼席と夜席とあって、東京の人がそこへ集まっちゃった訳ね。

パテー館へ初めて来た時なんかね、その当時フラフってもの出すんですよ。旗、日の丸の旗みたいのあるでしょ、真中に私の紋を出して伊達子さんと書いて、ひいきのその呉れた人の名前を書いて。一番上等が縮緬ね、縮緬といっても今のと違う太い、だからドッシーンとするようなね、そういうのを一対呉れる訳なの、それを天井からぶら下げる。その

他に提灯ね、桟敷の方につるでしょ、提灯の真中にコバタってのがあるんですよ。それから幟が、もうね、何本でも表に立つんです、今の相撲みたいに。ひいきの多い人ほど幟が立つのね。いっぱい貰っちゃって帰る時は行李がいっぱいになる程でしたね。

毎晩どこかへお客様が誘ってくれるんですよね。それでも決して一人なんかでは行かないのね、三味線の人と必ず二人。それも公園の「一直（いちなお）」だとか「草津」だとか、そういう一流の所へ連れてってくれるんです。でも、大阪から行った者は、そのホノベさんという人の家に泊ってましたから、そこへいつでもお土産持って来てね、あすこの家の物って余り食べたことない程ね。そんな風でした。お呼ばれして、御祝儀もらって、お酌ひとつしないで帰ってくるんだから、随分愛想のないお話よね。

## 結婚～震災の頃

まあ、そうこうするうちに縁談がありましてね。大阪に居る時分にも、まあ若いから色んな事を言ってくれる人もありましたがね、二号でしょ。うちの兄がね、紙屑ひろいでも何でもいいから人のめかけ、てかけにはなるなって、そんな事言われたのが頭にあったから、結婚式を挙げてみたいって、夢だったんです。その話の人は一番末っ子だったけど、結婚式が挙げられるっていうんで来ちゃったんですよ。それからずっと東京に来てるんです。

えゝ、結婚でしばらく休んでましたけど、まだバテー館があって、出てくれ出てくれって言って来られて――その当時は月給なんですけど、相当下さるのよね。だから、丁度うちの主人の姉が家に居りましたんでね、「私が面倒みてあげるから、あんなに言って下さるんだから出てあげなさいよ」って訳で、よう出ました。だから一番上の子なんか姉さんが育ててくれたんです。次に出来た子には丁度いいばあやがいてね、家で子供の面倒みてるより自分でやりたいことやってる方がいいもんだから、ずっと出てました。

＊　＊　＊

それから市中の「宮松」も時々行きました。宮松ってのは、茅場町のね、今の証券ホールの裏あたりになるの。そこは摂津大掾師匠だとか、うちのお師匠さんとか、皆お出になったらしいわね。いい舞台でしたよ、小清さんがお出になったのを聴きに行ったこともありましたけどね。えゝ、震災の時までありましたよ。

震災の頃は、ボッボッ寄席が残っててね。猿幸さんはその当時、まだお貞ちゃん、お貞ちゃんなんて言って寄席に出てたことあったらしいんだけど、猿昇さんていうのは猿幸さんよりずっと姉弟子なんですよ。いい芸してらしてね、その人に弾いてもらってあっちこっち行ってました。電車でかけもちなんかしてね、その時そうね、ま、七、八軒あったかもしれませんね。どこ行っても余り入らなかったですけどね。

## 語りもの

そうですね、まあ何やっても思うように行かないけども、何が好きなんだろう。好きっていっても声の都合でやれないしね。気の張る時にやってみようと思うのが、まあ好きなんでしょうね。本蔵下邸、やってみるとあんなものもやりいいし……朝顔なんての好きですよ。えゝ、嫌いなものは……合邦、余り好かないの。でも好き嫌いって言っても、声の具合でね。先代萩なんか、お師匠さんにとても喧ましく言われてね。あゝじゃない、こうじゃない、政岡がどうやらこうやら、品が悪くなったり、固くなりすぎたり……随分言われたんでその通りやってみたいと思っても、声が思うように出てくれないから、最近は先代萩もやったことはありませんね。

＊　＊　＊

もう五十年も前かしらん、私いっぺん、上も下も全然声が出なくなっちゃって。ポリープが出来たんです。で、東京中の良いお医者さんを全部行ったんですけどね、あなたのは出来場所が悪いって訳なの。取るより化膿させてしまって軟くして、それを治す方法にしましょうって、キツイ薬をつけてね。痛いんです、どうにも我慢できないような、もうカーッとしちゃってね。大阪の古靱師匠が行ってる病院も行きましたしね。でも、どこへ行っても出来場所が悪いって言われる。これは仕方がないと思って巣鴨のお地蔵様へ願かけたり、色々なことをしたんです。そしたら慶応の林義雄先生って方を紹介して下さった人

があってね。「出来てるよ、いつ取るかい」って、こんなにおっしゃる。日を決めてその日に行ったら、もう二、三分でね。始まりにグルグルつける、その時の方が苦しかったけど後はもうチョコッと針でもついたみたいな感じがしただけ。先生がエーって言わしたら、とてもじゃないけどかすれて出なかったのに今度はエーって出るんですよ。取ったのを見たらお米つぶ半分に割った位、その位なもんですよ、そんな事があったの。

その時にね、素人のお稽古の人が多かったですからね、何教えてくれって言うかわからないし、こんな声では歌うものは駄目だと思って、それで引窓とか岡崎だとか太いものをやるようになっちゃったの。お師匠さんが艶語りでしたからね、それまで私は艶ものばかり――先代とか酒屋とかを得意としてやってたんですよ。それもまあ、幸か不幸か、何でもやるようになったけども。

今は、声帯が軟らかくなっているんですって。風邪ひくともうひどいですわ、だから風邪ひくの恐くて恐くてね。今月は本牧亭がないから少しのんびりしてるの。ある時は何だか頭につかえていてね。まして今度あんなもの頂いたら、あんなことでって言われるのが恥かしいと思うんだけど、一所懸命に。何てったって声が出なけりゃどうにもならないものね。

## 土佐広襲名

昭和十六年、日本橋クラブでした。浜町河岸の頃合いな、とてもいいクラブでした。語りものは長局、今は余り声が出ないので出したことありませんけどね、長局はその時分好きだったんですよ。その時はお素人の人ばっかじでやってもらいました。残ってるプロ見ますとね、安藤鶴夫先生だとか、松尾先生、川口子太郎さんなんかで、それはもうお素人のこの方って人を全部入れてもらって。それでお師匠さんが口上言ってやるっておっしゃってたのが、急にあんな事になっちゃって――

披露のことで手紙で相談してて、最後の相談にあがる時に、大阪へ行こうと駅へ行ったら、娘がとんできて「お母さん、びっくりしちゃダメよ」って電報渡されて……「トサタユウキュウシ」ってあったんです。嘘みたいな夢みたいな気がして、とにかく師匠のお宅へ行ったんだけど、その時ほど悲しかったことはかつてない。行った時、奥さんが「これ見なはれ」って見せてくれたけど、日記帳に「明日は伊達子が来るはず……」って書いてあった。今にも起きそうな顔してて……その時私は本当に悲しかった。今そのこと考えても泣けてくる程悲しかったの――

私もう、いっぺんにがっかりしちゃって止めようかと思ったんですけど、色んな準備しちゃいましたからね。当時、綱助さんに弾いて頂いてたんですけど、一諸に披露してくれってことになって、そしたら綱造先生が、「なら、わしも一諸に口上言うてやる」言うて、綱造先生、香伯先生、鏡太夫さん、それからお師匠さんの代りに米太夫って私の兄弟子が挨拶して下すったの。師匠が冥途からお前行って挨拶してやれって言うてますなんて……

綱助さんていうのは静岡の人で、大阪・京都とずっと古い友達でね。その人が東京の桔梗さんという人の所へお嫁に来て東京に居たもので、相三味線でやっていたんです。当時猿幸さんは染登さんを弾いていました。えゝ猿幸さんと組んだのは戦後ですね。

（昭和57年8月　土佐広師宅にて）

聞き手　竹本　朝重
文責　水野　悠子

二号にわたった土佐広師のお話は、漸く昭和十六年までたどりつきました。戦中、戦後の義太夫とのかかわり、永年の相三味線だった豊澤猿幸師のこと、義太夫界の今後の展望等、まだまだ伺いたいことが沢山あります。いずれ折を見て、連載したいと思います。

お忙しいなかを、インタビューに応じて下さった土佐広師、テープを原稿に起して下さった竹本素丸さんに感謝いたします。

## お見舞

義太夫協会副会長・義太夫節保存会会長の豊澤仙広師が、角膜下出血のため九月十六日東邦大学大橋病院にて緊急手術。手術後の経過は抜群で、十月十四日に退院されました。

御無理なさらず、ゆっくり御静養下さい。

# 七十年前の寄席の雰囲気（続）

相談役　豊沢猿三郎

明治の終りには寄席が数十軒ありましたが、宮松、若竹、琴平、東橋、二山、神市場、二洲、常盤等の各亭は絶対の義太夫定席でした。宮松以外の席亭は、一、三、五、七、八、十の大の月の三十一日は独演会、親子会、姉妹会等個人的な会をやっていましたが、宮松亭は、其の日は男義太夫の勉強会と称し、朝太夫、松太郎両師を除いた二十高座で、朝十時から夜十時迄でした。切の掛合は猿之助師が勤め、どんな時代物でも太夫と同じ人数のツレ弾きが出ます。なかでもお客様にご好評で度々出ましたのが合邦でした。奥の調子の上がる所で舞台両袖の杉戸が開くと、ツレ弾きが六人又は八人並んでいます。〽外には父の親粒が…からツレ弾きの人が一人宛分けて弾き、腕比べです。念仏は全員大合唱です。〽内には難なく切さく鳩尾…から大落しまでを又弾き分けで、〽東門中心…から全員合唱、ツレ弾きは一の糸を二本下げて、一下りにし、〽善知識…までを木魚の音になぞらえて一と二を開放音にしてシャンラン　シャンラン許り定間で弾きます。其の間を師匠が鈴の様な音で、木魚に合せて機械の様に弾きます。お客様は此の処がお好きなのでしょう。ウーンと溜息をつく許りです。お客様と申せば、堂摺さんはまァ姿と声が第一条件で浄瑠璃は次の問題です。定連さんは仲々難かしく、なかでも江沢さんなぞは義太夫もお上手でしたが半畳も仲々お上手で、不勉強な太夫の声帯模写で節をつけてやります。例えば日吉で〽命を捨つるは天晴れ天晴れ（甘茶でカッポレ）ヲヽ…。本下で〽列を並べて皆殺しウフ……（まづーい）うまーいッン。又小音の太夫の時なぞは二階と舞台の前と二人掛かりです。二階の定連が「太夫さん聞えませんヨ」舞台前の定連が「うるさい、舞台の前だって聞えないんだ」マイクのない時代にはこんな悲しい事も有ったのです。文〇〇と言う十代の美人の初看板の時は、堂摺さんは大喜びでしたが、二、三日後にバトロンが日本で一、二の書房の社長と判るといっぺんに悪口に変り、アヽいい女だよ、いい声だよ、義太夫はお下手だよ、旦那のお顔が見たいよ、なぞ喧々ごうごうです。お茶子や若おかみさんがお静かに願いますといっても仲々静まりません。裏正面一段高いお茶番にいる老おかみさんが、アノ粋な声で「お静かにして上げて下さい」と申しますとシーンとします。不思議でした。一方三味線の方の第一人者はやはり清一さんでした。毎朝ご主人やお子達を送り出してから蛎殻町の猿之助師の所へ、午後は築地の小清師の所と柳橋の播磨太夫師の所でお稽古を受けそのまま楽屋入り、持参の弁当（昼食）を食べて舞台です。清一さんの高座はお客様も固唾をのんで聞いております。いざと言う時は万雷の拍手です。若い女子部の人は、宮松亭で清一さんに弾いていただいて看板を上げるのが最大の名誉だったのです。その当時福龍さんと言う人がいました。いつも私は何も修業してないよと言って居られましたが、天禀の名音と手の廻る事といったら機関銃の様で、お客様は大浮かれです。太夫にかまわず弾きまくるのでよい太夫は付きません。おもに娘さんか若い太夫を気楽に弾いていました。

前号は大分長い稿が有りましたので、今回はご遠慮しようと思っておりましたところ、編集部から読者さんのご要望故至急書いてくれとの事で、取急ぎ誠に乱文でございます。平にご容赦を。

**第21回　竹本朝重りさいたる**

☆昭和57年11月1日（月）6時30分
☆銀座ガスホール　☆一、五〇〇円

浜田広介の代表作〝泣いた赤鬼〟更に練り上げて、六年ぶりの再演。古典は、安達原三段目、重造・重輝・浅造が出演いたします。お申込み、お問合せは
朝重後援会（七五四）七三〇四

## 教師のための義太夫節研修会

教師のための浄瑠璃（義太夫節）研修会―文化庁助成―を、十一月二十日（土）五時半より、上野広小路本牧亭にて開催いたします。今回は、桐竹智恵子指導・ひとみ座による〝乙女文楽〟の特別出演があります。滅多に見る機会がありません、どうぞ御期待下さい。

去る六月二十一日の研修会（八王子車人形出演）のアンケートのうちいくつかを御紹介します。

○たいへん素晴しく感激しました。これからもチャンスがあれば聴かせて頂きたいと思います。授業のよい参考となりました。
○三味線の音の美しさを再認識しました。
○とても楽しい時間を過ごしました。プログラム構成がいろいろで面白かったです。ただ三味線解説が後にいたせいでよく聞きとれず残念でした。
○三味線解説の時、せっかく細三味線の方がいたのだから、〝野崎村〟の段切れや〝千鳥〟の合方など、掛け合いで弾いてもらえばもっと良かった。
○めずらしい八王子車人形、車人形という意味がよくわかりました。足づかいが面白いですね。
○迫力がありました。圧倒されました。
○たいへん楽しく勉強させていただき、心が豊かになった一夜でした。
○「人間国宝」土佐広師の熱演には感動しました。身近に拝聴できて幸せに存じおります。益々お元気で斯道の発展に御尽力いただけますことを祈願して止みません。
○車人形入り「壺坂」、素晴しいの一語に尽きます。義太夫は人形と組んで一段の光彩を放つものと愚考するのですが如何なものでしょうか。
○日頃なじみがないので、チンブンカンブンかと思いましたが、大変わかり易かった、生徒達でも充分鑑賞できると思いました。
○正直言って、会場で配布されたパンフレットがなかったらわからなかったかもしれません。
○客席のうしろで、挨拶？する人がうるさかった。洋楽の演奏会では考えられない事だ。

### たたみ敷の会場について

○椅子よりも好きです。
○足はシビレますが、イスでは雰囲気がでないと思います。
○私は「たたみ敷」こそ情緒があってよろしいかと存じます。
○大正生れには懐しさが一杯で……
○庶民的な感じがよい。しかし足がしびれました。
○若いのにダラシないのですが、背もたれがないのがつらかった。お年寄の方が平気なのかな？
○タタミだったから余計、日本の伝統芸術の良さが身に沁みたような気がします。

## 義太夫教室研究発表会

＊昭和57年11月13日（土）一時開演
＊浅草公会堂第二集会室

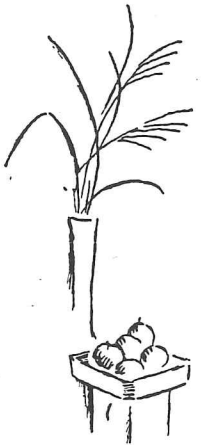
柳・いろは送り　義太夫教室35期生有志
弥乃太夫・綾之助
団子売　藤井重行・柴田　洋子
平野良一・安田香名子
政岡忠義　吉田　享・羽島かおる
柳　竹本素丸・奥村由伎子
竹村謙介・竹本綾之助
村岡泰子・塩田栄子
吉川和夫・加藤道子
薬売り　竹本駒之助
寺子屋　村松泰子・山田レイコ
竹本　朝重
太十　真岩まこと・野澤　吉平
陣屋　菅野光雄・鶴澤　重造
太田正文・竹本弥乃太夫
出月清人・豊澤仙之助
吉野山　鈴木　登・高橋　尚子
羽山照子・清水　泰子
西野夫佐栄・浅賀喜久江
磁田　貞子

＊終演後（夜）懇親会　参加費―五千円
於沢田本店（公会堂西側・徒歩二分）
参加御希望の方は、協会事務局又は各期世話人まで――十月末日〆切

## 協会の動き

昭和57年8月より
昭和57年10月まで

8月20・21日　芸団協助成〝女流若手盛夏勉強会〟　於本牧亭
8月23日　義太夫教室中級語りコース開講
講師―竹本綾之助・弥乃太夫
於銀座三丁目東町会事務所
8月26日　義太夫教室中級三味線コース開講
講師―野沢吉平
於銀座三丁目東町会事務所
9月7日　公演部会　於新小松
9月12日　学校巡演　於八王子第六小学校
9月20・21日　義太夫協会公演会　竹本越君
初舞台　於本牧亭
9月22日　邦楽連合会　於長唄協会
9月24日　東京都教育庁、決算報告等提出
10月6日　公演部会　於事務局
10月20日　義太夫協会会報　第二十六号発行



## 新入会員御紹介（敬称略）

[redacted]

（中部素義会の部）

[redacted]

## 住所（住居表示）変更（敬称略）

[redacted]

## 訂正

[redacted]

## 訃報

■渡会宝運氏（特別会員）　57年5月逝去
■渥美文三氏　57年8月18日逝去
（紙屋の旦那、紙屋治兵衛さんと親しまれた本牧の御定連でした。客席にお姿が見えず寂しい限りです。）
■加藤聚楽（清二郎）氏　57年9月24日逝去
（大日本素義会の創立者で、二十年に亘り、会長を勤められました。義太夫協会では常任相談役をおひきうけ下さいました。）
御冥福を心からお祈り申し上げます。

## 会員名簿発行

―御協力お願い―

新入会員も増えましたので、来年を目標に会員名簿を発行することにいたしました。つきましては、
＊住所（住居表示）、電話の変った方
＊電話新設・電話を登録していない方
＊入会希望の方
事務局まで御一報下さい（十月末日〆切）
（五四一）五四七一　月～金　11～4時
尚、広告欄もございますので、御希望の場合は御相談下さい。

✿前号でお願いいたしましたSPレコードをテープにうつす仕事について。賛助会員の矢向正人氏が引受けて下さることになりました。時間ばかり喰う作業ですが、どうかよろしくお願いいたします。

## 編集後記

前号は楽しく読んでいただけたようで、皆様、面白かったとおっしゃって下さいました。その印象の薄れぬうちにと、26号は一寸急いで発行いたしました。ギネスブック登場の期待される団司師の話も伺いたいし ―となると年三号では無理でしょうか？　そろそろ名簿の準備に入りますので、今度は新春号の予定です。